

オポナカムラ 彩発見!!

オポナカムラは古代語で「大中村」の意。
 国指定史跡「大中遺跡」の最新の調査をもとに、様々な観点から
 ふるさとの誇れる遺跡について考えてみたいと思います。

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079(435)5000



播磨町マスコットキャラクター
いせきくん、やよいちゃん

郷土資料館の展示室で
弥生語が聞けます



5 「弥生語」は秘密の呪文

郷土資料館では、弥生時代後期の大中遺跡に住んでいた人たちが使っていた「弥生語（古代のことば）」を聞くことができます。どのようにして古代のことばを再現したのでしょうか？

これは、神戸市外国語大学の長田夏樹先生（故人）が古事記や万葉集などの表現法や発音をもとに研究されて考えられたものです。まず、現代語を奈良時代やそれ以前に使われていた「上代日本語」に直します。上代日本語は、当時の話しことばで、古事記や万葉集などでよく使われていました。次に、上代日本語を「弥生語」に直します。このステップを身近な例文で考えてみましょう。

① 大中村は楽しいムラだ（現代語）

② おほなかもらは たのしき さとなり（上代日本語）

③ オポナカムラバ タノツイキ ャトナリ（弥生語）

これを見ると、各時代で表現方法や発音がかなり異なり、変化しているのがよくわかります。「弥生語」には、そう簡単に直せませんが、特徴をいくつかあげて考えてみましょう。

一つは、例文からわかるように「弥生語」には「八行」がなく、「ハヒフヘホ」は「パピペポ」

になります。サ行は、「ツァツイツウツェツォ」と舌で発音していたのではないかと考えられています。

また、「海」は「ウミ」、「魚」は「ウウォ」と発音し、現代語と変わらない表現もあります。さらに、何回も声に出して発音してみると、うなずける表現もあります。たとえば、「木に登って遊ぼう」は、「クイニノムポリティアツオムブン」ですが、「遊ぼう」を現代風に「アツオボウ」と表記すれば、わかるような気がしませんか。

資料館の展示室にある「弥生語」は、播磨町の小学生によってテープに吹き込まれました。当時はふり返り、長田先生は、次のように書かれています。

「男の子は、最初はひどくとまどっていた。しかし、弥生語に慣れてくると、秘密の呪文を習っている気分になったらしい。そのうち、少年は顔を輝かせて弥生語を操っていた。教えるわたしもつられて、浮き浮きした気分だった」

「弥生語」には、不思議な魔力があるようです。

町の人口 7月1日現在

34,217人(+2人)

(住民基本台帳人口+外国籍人口)

男…16,807人(+1人)

女…17,410人(+1人)

世帯数…13,607(+2)



Trademark of American Soybean Association

